HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	参加学生の声
Citation	高等継続教育研究, 1, 190-196
Issue Date	2002-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/51868
Type	other
File Information	Sankagakusei-1.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

2－2 参加学生の声

■相川 絵里 （学部3年）

「調査を通して触れた”大学と地域”」

私は、この一連の大学の訪問調査に参加して、全体的に、初めて知ることや発見する視点が多かった。また実際に訪問して話を聞くことによって、少し具体的に実態などをつかむことができたように思う。よって私は、ここではこの調査を通しての全体的な感想を述べたい。

まず、私が感じたのは大学と地域との結びつきの強さであった。もちろんこれは個々の大学によっても異なるとは思うのだが、今まで私は、「地域との連携」といったときに、具体的な事柄を想像し難かった。だが、実際に地域との関わりについて話を聞くことによって、少し理解を深めることができた。調査の中では特に、拓殖大学北海道短期大学で伺った話が、とても印象に残っている。深川市を中心にして、大学が規模の大小はあるが、さまざまな地域おこしに加わったり、公開講座や社会人入試など、地域住民・社会人への開放がなされていた。それは今まで私が持っていた私立大学のイメージを超えて、地域との結びつきを考えさせられた。

そして、調査の後半ではいくつかのサテライトキャンパスも訪問した。これも私は存在自体をあまり知らなかった。まだ、始まって何年かしか経っていないところが多かったが、新しい発想のもとに行われていることを感じた。そこで行われている事業の内容もさまざまであった。生涯学習としての利用がなされていたり、卒業生のアフターケアのようなものが行われていたり、大学と離れたもう一つの場所として利用されていたりと、今後もサテライトキャンパスはさまざまな可能性を持っているように思った。

また、現在的な問題として、やはり私立大学の経営や国立大学の統合の問題などとの関わりについても印象的な内容が多かった。サテライトキャンパスなどの設立についても、そのような問題との関係がある部分もあったことにも少し驚いた。たとえば札幌学院大学のアクティブセンターについての話は、その活動の内容と実態についてはもちろんだが、その運営における経済上の話についても興味深かった。

最後に、さまざまな要素が絡んできたときに、その大学の理念や目指す方向性が、ぼやけてしまったり、失われてしまわないのかが気になった。また、サテライトキャンパスなどのように、大学がある意味で範囲を広げていくときに、「地域」というものをどう捉えていくのかについても興味がある。やはり大学と地域は切っても切り離せない関係だと思われる。そして、どのような状況においても、その大学自身の理念などは守られるべきだと感じた。 今回の調査は、私にとっては、今までより視野を広げ、色々なことを考えるきっかけとなった。大変充実しているものであったと思う。

■相澤 里奈 （学部2年）

私は現在某予備校でバイトをしているために、受験生と触れ合う機会が多い。そのため、千歳科学技術大学を訪問させていただいた時にも、その学校に行きたいと言っていた子のことを頭に思い浮かべながら色々考えてしまった。

自分が本当に行きたい大学を選べる子は一体何人いるのだろう。行ける、行けないという問題ではなく、「行きたい」大学にである。おそらく半数にも満たないのではないだろうか。いや、もしかしたら考える機会がないのかもしれない。もちろん受験生だって自分の人生だから色々と将来について考え、そして行きたい系統、学部を決めるだろう。だが、その先まで、つまり A 大学の○○学部と B 大学の○○学部では、A 大学のほうが自分が興味の持てる実験をしているから、などという理由で大学を決めている子は何人いるのだろうか。おそらくほとんどの子は偏差値で大学を決めている。これは今現在私が受験生と触れ合って思っていることだから、多分これから先もしばらくは変わらないであろう。

私は千歳科学技術大学が授業でどのような学問を教えているかという話を聞いたとき、素直に面白そうだな、と思えた。学問的に魅力があると思えた。おそらくこのような大学が生き残っていく上で一番必要なことは、企業側との提携ももちろんだろうが、高校側との提携である。学校に乗り込んで、進路指導の先生だけではなく、生徒に直に学問自体の面白さについて語りかけてほしい。特に地域との結びつき、人口の流出を防ぐには地域の高校と密接なつながりを持つべきであろう。この学校の学問の面白さはそれだけで十分に人をひきつける物がある。問題はそれをいかに偏差値よりも価値があるものかということを、世間に伝えていくことであろう。

■上田 敦 （学部2年）

大学に入ってから、他の大学に行ったのはこれがはじめてでした。普段行かないところだったし、施設や設備は新鮮に見えました。千歳科学技術大学など、今回いろいろな大学を見学してきたのですが、これがはじめてだったこともあり、各大学の様子をどういう観点から、どのように考えていけばいいのかが正直にいうとよくわかりませんでした。なので、ここからは本当に感想のみを述べていこうと思います。

光という最先端の領域から理学や工学を考えていくということは考え方としていい考えだと思いました。

また、学内では学生証の中に IC チップが組み込まれていて、教室にそれを使って入ることができたりするのはどこの大学でもやっていますが、電子マネー機能がついていてそれで学内の購買で買い物ができたり食堂でご飯を食べられたりするのはおどろきでした。電子マネーの話とかは聞いてはいたけど、それが実際に大学の構内で使われるようになっていることは、単純に時代は進んだんだなと思ったりもしました。

しかし、それらはいいとは思ったのですが、それ以上にはあまり特に注目したいところは見つけられませんでした。

電子マネーは確かにおもしろいとは思いますが、それをこの大学で何のために使っているかなどの目的がよくわかりませんでした。ただ楽だから使うだけではあまり意味がないし、実際に使っている様子や、学内で教育時に使われている様子が見ることができたらよかったと思います。

公設民営大学というかたちをとったならば、やはり地元への還元が必要になってくると思いますが、この大学は本当にその役割を果たせるのかもまだこれからを見ることが大切なんだなと思いました（そもそも千歳に大学を作る必要が本当にあるのかどうかわからない）。

でも、光に興味のある人がここで学んで光のスペシャリストになったりすることができるなら、それはその道を進みたい人にとってとても魅力的なものになると思います。目的やビジョンがしっかりしていればこれからもこの大学は残っていくでしょうし、他の大学を見ていくときもその大学の目的や実践を見ていきたいと思いました。

■大嶋 亜耶 （学部2年）

千歳科学技術大学の訪問調査感想

他大学に調査というかたちで行ったことがなかったのでとても新鮮でいい経験になったと思います。ただ、全くはじめてのことだったのでそもそも調査とは何をするものなのか、といった基本的なこともわからない状態で参加したので説明などを聞いてなるほどと感心してばかりだったような気がします。それで、わからないなりに感じたことは運営が大変そうだなということでした。その理由として一つは、光テクノロジーというこれから期待される全国的にも珍しい取り組みは注目すべきものだとは感じましたが、単純に千歳というまちに学生が集まるのかということです。大学は新しくてきれいだったけど、まわりに何もなさ過ぎて大学生活を楽しむという環境ではなかったように感じました。もう一つは、学生の授業料だけで経営して、かつ最新技術を研究するとなると相当厳しいものがあるだろうということです。授業料は今でも

安いとはいえないし、今後値下げされることはまず考えられないので、ますます学生を集めるのが困難になりそうだと思いました。また、あまり関係のないことかもしれませんが、千歳科学技術大学の方では学生が研究成果をあげることで大学を宣伝していって欲しいと言っているのを聞いて（なぜかとても良心が痛むのをかんじつつ）北大でも同様のことが言えるようになっているだろうけど、現段階では他方よりも切実ではないのではないかとも感じました。そのことに依存せざるを得ないのは仕方ないことだし、ある意味では当然といえるのかもしれませんが、学生が直接に大学の将来を担うのは一方でとても危うい気もします。

もっとたくさん考えるべき点があったのかもしれませんが、これから他大学に調査にいくときにはもっと掘り下げて違った角度からみることができたらと反省をこめて思いました。

■金澤 綾音 （学部2年）

大学訪問の感想

私が参加させていただいたのは千歳科学技術大学のみであった。しかも講義の都合で途中参加だったので、少ない情報しか持たないのだがその範囲内で書きたい。

数年前まで受験生であったが理系大学のことは全く調べなかったせいで、千歳科学技術大学については新設校で公立でどうやら光ファイバーを扱うらしいぐらいのことしか知らなかった。そのころから最先端をいく新しい学校というイメージはあったのだが、この大学訪問でそれだけではない、公設民営大学であるという面をはじめて知った。そもそも大学設立の経緯を詳しく知ったのもはじめてあり、他の大学がどのような経緯で設立されたのかわからないが、地域と大学の連携というテーマにおけるひとつのモデルといえるものがこの公設民営なのだろうか。他の大学と比較してみるのも面白いのかもしれないと思われた。公設民営のかたちが持つメリットをいかしつつ、デメリットをなくしていければ、国立・公立・私立等の大学とは違う新しい魅力を持った大学が登場しそうである。もとをただせば税金で設立された経緯が、行政・市民の一部に私立大学的な見方をもたらしているようだったが、今後の活動を通して行政・市民にも納得してもらい、民営を確立していければいいのではないだろうか。

具体的な活動の中で私が興味を持ったのは、市民への公開講座・講演などである。まだ評価されるほどの活動はないとのことだったが、新しい地域における生涯教育の一環と考えれば、そのことだけでも評価はできるのではないだろうか。大学の特徴上その内容には限りがあるかもしれないが、他大学や企業等との連携につながる可能性もある。外からは窺い知れない世界となってしまうのではなく、市民も味方にして（表現がおかしいかもしれないが）新たな風を吹き込んで欲しいと思う。いままでと違うかたちだからこそできるなにかに期待したい。

■川瀬 忠浩 （学部2年）

科学技術大学に関して

PWCやそのまわりの環境について予備知識がほとんどなかった私にとって、大きな勘違いが一つあった。千歳科学技術大学と千歳市の産業発展との関係、具体的には「光に特化した最先端の頭脳拠点を作り、高度産業集積をするというホトニクス・バレーという構想（訪問調査の泉氏の発言より）のコアとして科学技術大学を設立したという点を無視していたことがそうなのであるが、はっきりとした産業発展の構想の一環として大学を設立したということが窺えた。漠然と市の予算の3分の1を使ったのでは、とも思っていたので、それは浅はかであったと思った。今はまだ設立されてから時間が経っておらず、大学の評価（特に経済波及効果が話題に上っていたが）をするという段階ではないのだろうが、光科学に特化した産業発展の一部として大学を設立したことは、少なくともいい方向に発展していく基盤はあるのではないかと思う。だが、もちろん問題点も考えられる。科学技術大学を卒業した学生の能力の問題、

果たして千歳市が望む産業発展の要員になりうるだけの学力を得ているのだろうかという疑問がある。これに関係して、就職の問題、千歳市の産業のコアに科学技術大学を置いている以上、その方向で学生の就職を考えていかなければならないと思うのだが、どこまでそれがなされているのかは疑問であった。泉氏の話からは今年初めて出した卒業生の就職状況は良かったと感じているように思えたが、この段階で評価をすべきではないと思った。この問題に関しては5年後、10年後における学生の卒業後の進路を見ることではかっていかなければならないと思う。

この訪問調査で私は、市の持つ産業発展の道のりが非常にはっきりしているという印象を受けた。まだはじめての卒業生を出したばかりで、科学技術大学の卒業生がどのようにホトニクスバレープロジェクトに関わってくるかはわからない。しかし、産学官共同のイメージを持っているわけであるから卒業生が大学で得た知識を還元していかなければ大学を市の費用で設立した意味がないと思う。そういう意味でこれから先の卒業生の進路には非常に興味をもっている。官と産の領域がそれを助けられるような形を作れればその達成がなされやすくなると思う。しかしそのためには学生の能力が前提にあることも当然である。

るものは大きいだろう。

明確な専門分野をきちんと身につけることができ、専門能力が地域にある企業にも還元されていくという仕組は理想的なものでもあり、そのために行われるTA制度、インターンシップなど制度に支えられて、学生は学問に対する目標をもって学んでいけるのではないかと思う。

外部資金なしで、学費による収入によって運営されているという現在の財政状況は健全であるが、少子化によって国立大学もが再編統合などと存続を危惧しているなかでは、確実に生徒を確保していくことは難しいだろう。しかし光テクノロジーというこれから発展していくであろう分野を確実に学べる場であり、身につけた技術を活かしていく場もあるということであれば、先を見通した自分の能力を特定分野で発展させていこうと考える学生をひきつけていくことができるし、新しく特色のある大学なので、これからでていく卒業生の活躍によって今後の大学のすすんでいく方向がみえてくるだろう。同時に設立過程にみられるような地域との結びつきをこれからより強めていくことが必要なのではないかと思う。

技術大学ではどのようなところなのかというイメージもあまりできていなかったので、具体的なイメージをつかむためにもうすこし大学内部の施設（研究棟など）を見学できたらよかった。

■後藤 美海子 （学部2年）

大学調査（千歳科学技術大学）の感想文

大学を訪れてまず、広大な土地の中にポンとある大学に驚かされた。

公設民営という、これまでにあまりみられない形態の大学だったので、設立過程や運営状況などに興味をもった。とくに設立の経緯は他大学とのつながりや千歳市、そして議会との話し合いなど、このような機会でしかきけない内容のことをきくことができておもしろかった。

千歳市を新しい産業の拠点としていくための、中心となるものとして建てられた技術大学に期待され

■佐藤 革馬 （修士1年）

今回の大学調査に同行し、地域と大学の連携の必要性、重要性を改めて感じた。特に、少子化に伴う大学淘汰の時代を迎えるにあたり、各大学の生き残り策をまざまざと聞き、また調べることで、今後の高等教育機関の展望が多少なりとも理解できた。

地域によって支えられている単科大学や短期大学は、やはりその地域への人材資源の還元を考えなければ、大学淘汰の波を乗り越えることはできないだろう。そのためにも、さらなる地域との連携、地域への貢献を実践的に取り組んでいく必要がある、と強く感じた。

世界ではグローバル化が進んでいるが、グローバルな視点と共に、基盤となるローカルな部分を盤石にしていくことが、地域の高等教育機関の担うべき役割であると、感じている。

■白取 尚広 （修士1年）

調査の第一印象は、学部を卒業してから6年に過ぎない身でも目新しいことが多く見られたことである。例え母校でも自分が在学していた当時には無かった施設や教育制度がある。例えば、本研究でも明らかにされているとおり、1990 年代前半の北海道内の大学には、まだサテライト事業を行っているところはなかった。多くの大学でシラバスが整備された。社会人学生または社会人大学院生が多くなった。他にも近年の卒業生が知らないことが大学にはあふれていた。この数年で北海道の大学（短大）も、かつてないほどの早さで変わっていることを実感させられた。この感覚は、かえって卒業して僅かな年月しか経っていない自分だからこそ感じたことかもしれない。

近年の IT の普及などにより情報通信分野におけるタイムラグの格差は縮められてはいるものの、一般に北海道は首都圏より社会環境が変化するペースが遅い。このことは、北海道の大学（短大）は首都圏の大学（短大）と同じような変革では遅れを取るということを意味する。つまり、存続が難しいということである。やはり北海道の大学（短大）には首都圏の流れに紛らわされずに独自の方向性をもった変革が必要ではないだろうか。

本研究の対象となった大学（短大）は、全般的に地味で派手さが無い所が多かった。しかし、その実は地元に不可欠な人材を送り出している貴重な教育機関であり、地元に特化しているという印象を受けた。実際、サテライトを東京に置かず、札幌に置くという大学が多いこと自体、視野は北海道内に絞っている証拠である。北海道の大学（短大）は道外からの入学者割合が多いとも言われているが、地元地域が大学（短大）を支持する基盤に優れているため、地域人口が少ないながらも安定した運営が可能な大学（短大）もあるともいえる。地元地域の支持を維持することは、全国的な知名度や人気を維持することより難しく、大切なことではないか。その点においては、好感の持てる大学（短大）が多かったことに心強さを感じている。

確かに全国的な時代の変化を無視することは難しい。国立大学の独立行政法人化、遠山プラン（トップ 30 ）などは、仮に実施される場合は全国一斉なのであるから避けられない変化の波かもしれない。

それでも今回調査した各大学（短大）には各大学（短大）らしさを失わずに、今後も腰を据えた研究及び教育活動を続けてくださることを期待する。現代社会は、あまりにも多様化し、変化の速度は速まる一方である。この御時世だからこそ、一度振り返って、じっくり学び、研究をしたいと思う人々も多くなることだろう。その期待に応えられる可能性が最も高い大学は北海道の大学ではないかと思う。今回調査に協力していただいた大学に感謝するとともに、北海道で生まれ育った者として今後も変わらぬ地元への多大な貢献を期待したい。

■滝ヶ平 真也 （学部2年）

大学調査の感想

大学数が増加の一途を辿り、その後に待ち構えるもの、それは大学生の入学人数が少なくなった大学の自然淘汰であろう。この不況下において、学費がそれほどかからない国公立大学はまだ生き長らえることが可能かもしれないが、今回の大学調査を通じて、学費の高い私立大学はこれまで以上に独自の特色を前面に押し出していかないと今後生き残っていくことは極めて難しいということを改めて実感させられた。大学数の増加や少子化など、様々な事象が重なって、今後将来的には大学全入と呼ばれる時代に突入するわけであるが、私立大学に限らず、国公立大学も今回の調査で見てきたような、例えば地域社会との連携や大学院の充実、生涯教育、魅力ある特色作りなど、このような改革を積極的に行っ

ていく必要があるかと思う。大学という場所がレジャーランド化しつつあるということは言うまでもないが、前にも触れたように、存在意義を喪失した大学は消えていく運命にあるのだから、本来の大学の存在意義を改めて確認するためにも、大学はその時代や社会状況に応じて変容を遂げていかなければならない。

■谷 雄一 （学部3年）

大学調査感想文

去年1年間を通して北海道内にある国公私立の大学、短期大学を調査してきました。各大学は、少子・高齢化社会、生涯学習社会をみすえ、また、国立大学の法人化もほぼ避けられない状況を踏まえ、生き残りをかけて様々なことを行ってきているように感じました。もちろん不十分であると感じるものや示唆に富むものもありましたが、どの大学も「何もしなくてすむ」とは思っていないようです（少なくとも調査の対象者の方々は）。

さて、私がその中でも印象に残っているのは、北海道教育大学旭川校の調査でした。この感想文ではその話を中心に7月下旬に行われた旭川調査全体のことについて振り返りたいと思います。

北海道教育大学は、教員養成を主たる目的として創設された大学でしたが、最近は、教員採用も非常に厳しく、また、中学・高校の教員免許は他の大学でもとれるところが多いので、実際には教員採用率は減っているのが現実のようです。そうした状況に伴って、15年ほど前からはいわゆる「ゼロ免」課程なるものが創設され、そこでは必ずしも教員免許をとることが卒業の条件ではないとされています。最近では、教員採用の数が激減しているために、非教員養成の課程に定員を振り替えたりもしています。また、国立大学の法人化、再編論議も盛んで教育大の5校体制も維持することは難しくなり、今後のあり方について話し合いがなされているようです。

このように様々な問題を抱えており、教育大は「さぞかし大変なのだろう」というような思いを持つにいたり、私は今回の一連の大学調査の中では旭川教育大学に特に注目していました。

調査は「生涯学習教育研究センター」で行われました。雨も振り出した中、教育大に到着すると、なかなか年季の入った建物が見え、国立大学らしく（？）古い建物だなぁ、と感じました。国立大学は「設備がしっかりしていないなぁ」と感じることが多いのですが、旭川校も例外ではありません。しばらく歩くと、センターの建物に到着。到着後、早速調査が始まりました。

調査では、「生涯学習教育研究センター設置の経緯（ゼロ免課程の設置と関連して）」、「ゼロ免課程の状況」、「他分校との関係」などについて聞きました。

調査の詳細は他のページに書かれていることでしょう。私がこの調査の中で感じたことといえば、「文部省の政策にずいぶん翻弄されたんだなぁ」ということです。ゼロ免を作らせたり、定員を減らしたり、統合を促したり……、といったような揺さぶりであり、これによって大学の教官としては、なかなか自主的に活動ができなかったのではないかと思います。もちろん文科省批判ばかりしていても仕方のないことです。そうした状況を考えると、学内措置で「生涯学習教育研究センター」を作ったというのは評価できます。教育大は、教員養成だけではもはや生き残ることができないと思います。それは教員の需要自体が減っているからでもあります。また、これからは、地域社会の要求に応えていけるような大学を作ることが必要であるということを考えたとき、教員養成系の大学が一県に一大学以上作られたという事実は、その県の教員をその県で養成していくということも含んでいるだろう（実際にどうなのかはよくわからないが）と考えると、他の国立大学に比べよりスムーズに地域社会とのつながりを見出せるのではないかと思います。教育大学は役割が終わったのではなく、役割を時代の要請に合わせつつ（もちろん普遍的な部分もしっかり残しながら）、現状の規模を維持しながら（縮小するとしても不必要な縮小をすることなく）残っていくことが理想的なあり方なのではないか、今ではそのように考えています。

以上が大学調査の感想というべきものです。特に

旭川地区の調査は2泊3日に渡って行われ、調査の合間には観光地的なところにも寄りながら、大学が抱える地域がどのようなものなのかについても触れることができました。長かった車中ではくだらない話などを通して（他にもいろいろ話したであろう）、他のメンバーと交流することができて非常に有意義だったと思います。感想はこんなところです。

■布上 恭子 （修士1年）

地域と密着した学校のよさは、研究所により大きく広がるように感ずる。そこで取り上げられるテーマも、講演、シンポジウム、公開講座それぞれ生活に直接関連することを学問的に深めることで、市民の教育への関心を高め、地域の大切な教育機関であることが強調されている。4年制大学化による教員と学生の確保が今後の大きな課題であろう。

■平島 みゆき （学部3年）

地域大学調査へ参加して

私は、第一次調査では市立名寄短期大学、北海道教育大学旭川校、旭川医科大学看護学科を、第二次調査では北海道医療大学サテライトキャンパスを訪問しました。公式に他大学を訪問して、そこの大学の関係者や教員の方に大学の現状と活動について直接お話を聞かせてもらうことができました。そこでは、入学してみなければわからない「大学」の姿を全貌ではないにしろ覗くことが出来ました。また「大学」は、このような訪問を受けることで、大学がどのように自らの大学を説明するのかが問われることにもなる、という当たり前のことを実感となって知ることができました。今回訪問させていただいた大学関係者の方は、北大教育学部高等教育論ゼミの教官や院生とのコネクションのあるところでもあり、自らの大学をどう見せるのかというパンフレット的なものにとどまらず、本音も垣間見えるようでした。

訪問してみた感想としては、特に短期大学の場合は、資格と職業に直接結びつく能力を獲得できかつアカデミックな教育が受けられなければ「短期大学」としての意義がなくなってしまう。そして職業に結びつくならば、地元に受け入れ先がなければ地域との接続が弱まってしまう。この点を強く感じました。

また私自身は看護教育を受けた身として、市立名寄短大と旭川医科大学の看護教育に興味があり、この点について感想を述べたいと思います。

市立名寄短期大学は、人口 2 万人の小さな自治体が持つ公立短大であることがまず注目できる点で、2 年制の生活科学科と 3 年制の看護学科があります。そしてこの短大が看護学科を持っていることが特に重要な点であると思います。

何故なら不況の中、短大卒の就職は厳しく、入学希望者が減少している中、医療系短大は国家資格と就職に結びつくため人気が高く、学生を集めやすいこと、さらには看護の場合、全国的には4年制大学指向で次々に看護の短大が4年制大学化へ改組されている中で、名寄市と短大は今後の身の振り方を迫られていくからです。これに対して旭川医科大学では、医学部のなかで医学科と看護科が共通の授業を行うなど医学に対置する形で看護があることがわかります。看護の大学院もあり、いわゆる全国的な主流を追うまたは担う大学であり、とくに旭川という地域の特性は見られなかったように感じました。名寄短期大学は、医学に対置する形の看護ではなく、生活する人間としての看護（栄養学に強い看護など）を目指していけるのではないかと考えます。私自身は、全国的な傾向に流されていくのではなく、公立としての短大の特性を教育に活かしていくことが最善の道だと思います。

また別な視点からみれば、看護教育において、学生にとって問題なのは三年制なのか四年制なのかということではなく、教育現場と臨床現場との教育を通じた連携であり、卒業後も働く上での困難や問題をともに考え解決へどうアプローチすればよいのかを学ぶことができる、生涯学習としての看護教育が今後は必要とされると思います。

北海道教育大学旭川校では、教員免許取得を目的としないゼロ免課程の現状と問題、そして教育大

学の統廃合問題も深刻である印象を受けました。

今回調査したどの大学も設置団体も規模も違いますが、その違いは、その大学の特色でもあり、その特色を活かして地域とどう結びついていくかが全ての大学に共通した課題であると思います。

第一次調査では教員と院生、学部生7人で夏の北海道を車で北上し、良い思い出にもなりました。御協力いただいた大学関係者の方にお礼申し上げます。

（五十音順）